

ワラボーであそぼう —自然素材をつかった幼児教育と表現活動—

Play with “Warabo” — Early Childhood Education Using Natural Material and Art Expression —

富田 晃*・松山 祐子**・長瀬 公秀***・野崎 克行***
Akira TOMITA, Yuko MATSUYAMA, Kimihide NAGASE, Katsuyuki NOZAKI

要旨

本研究では、ワラボーという棒状の藁の束をもちいた幼稚園での活動を紹介、考察する。藁は米の副産物として発生し日本文化の基層を形成してきた。藁は、軽く、やわらかく、保温性、通気性に優れ、人の体にやさしい素材である。藁を束ねたワラボーを幼児に与えて、どのように遊ぶか観察した。子どもたちは、並べる、積む、繋げるといったことをしながら、ワラボーを何かに見立てたり、ごっこ遊びをしたりして「造形遊び」を楽しんだ。また、活動の後半には、接合を可能にする補助部材を加えたことにより、「つくりたいものをつくる」造形表現が展開された。また、子どもたちは、ワラボーを遊具にして、飛び跳ねたり、かけっこをしたり、投げたり、打ったりと、全身をつかった運動をしたり、長さによって叩いた音の高さに違いがあることを発見したりと、実に多岐にわたる遊びを展開した。

キーワード：藁 ワラボー 造形遊び 表現活動

〇はじめに

本研究は、幼稚園においておこなった「ワラボー」という棒状の藁（わら）の束をもちいた活動を紹介、考察するものである。子どもは、川原で石を積んだり、雪で何かの像をつくったりと、材料を並べたり、つないだり、積んだり、重ねたりしながら、五感を働かせ身体全体で、楽しみながら、つくりたいものを自らの手でつくり上げようとする。本研究は、こうした「造形遊び」や「つくりたいものをつくる」活動に、日本の基層文化にある藁を取り入れたものである。

幼児教育玩具の代表ともいえる積み木は、「幼児教育の祖」とされるドイツの教育学者フリードリヒ・フレーベル（1782-1852）が、教育のための玩具として開発した「恩物」のなかに、立方体、直方体、三角柱の木片を入れたことにはじまる。子どもは1才頃から、積んだり、並べたりして積み木遊びをするようになり、3, 4才になると、何かに見立てて組み立てて、おままごとやごっこ遊びをするようになる。また、4才頃になると、接続分解可能なブロックをつかってかなり複雑なものがつくれるようになる。積み木やブロックを用いた遊びは、一人遊びのみならず、協同作業へと展開をしながら、他者とのコミュニケーションを育むの場となる。子どもは、積み木遊びやブロック遊びを通じて、協同性、達成感、表現力、美的感覚、想像力、思考力、調整力、物理感覚、立体感覚、集中力、独創性などを培う。（吉本、脇淵、2014）

本研究の活動は、千葉大学工学部で開発されたワラボー（宮崎、1995/長瀬、1996）という棒状の藁の束をもちいて、積み木遊び、ブロック遊びをするものである。同じ2020年秋におこなった「わらであそぼう」の続編としておこなった幼稚園における藁をテーマにした実践研究である。（富田晃、松山祐子、野崎克行、

* 弘前大学教育学部美術教育講座 Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

** 弘前大学教育学部附属幼稚園 Attached Kindergarten, Faculty of Education, Hirosaki University

*** 稲垣藁の会 Inagaki Wara no Kai

2021) また、本活動は、大学生がつくったワラボーを幼稚園の教材としており、富田と野崎が以前からおこなっている大学生を対象にした藁細工の授業を発展させたものでもある。(野崎克行, 富田晃, 2020)

積み木やブロックは、大概是木製またはプラスチック製である。積み木遊びやブロック遊びを、藁を素材とした遊具でおこなう研究は管見のかぎりでは本研究がはじめてである。

○ワラボーの開発

私たちの先人は、稲を育み、米の副産物である藁を使って、自らの手で生活用具を作り、使い、寿命が来たら土に帰り、田畑を肥やすという稲作を中心としたエコロジカルな生活を続けてきた。藁に代わる工業製品が容易に手に入る一方で、地球環境問題が深刻化する現代、日本の藁文化から学ぶべきことがあるはずである。長瀬は、千葉大学工学部工業意匠学科で藁文化研究の第一人者である宮崎清教授のもとで藁の研究を1994年に開始した。

伝統的な藁細工は、編組による面材としての利用や、縄に加工することによる引張強度を生かした使われ方が主流であった。藁は中空構造で圧縮強度に優れているので、縦方向の圧縮強度を生かし、椅子やテーブルを作れないかと、ワラボーの開発に取り組んだ。

「一本では弱い藁を、束ねることで強くする」という発想で、強度を上げるために、繊維を壊さない範囲で強く結束し、強度を測定した。測定の結果、直径6cm、長さ50cmのワラボーの圧縮強度は最大荷重111.9kgであった(写真① 1994年、千葉大学工学部の実験室にて)。強度を必要とする家具材としての実用の可能性を見出し、椅子やテーブルの試作を行った(写真②)。試作品は限られた条件下では実用性を確認できたが、ジョイント強度の問題が残ることから、ワラボーの新たな用途を探った。

藁の材料特性は、軟質植物繊維で、多孔質、中空構造がゆえに、軽く、やわらかく、保温性、通気性に優れ、いわば「人の体にやさしい」素材であると考え、また、自然素材に触れ合うことで情操教育の効果も期待できることから、子ども向けの遊具として適しているのではないかと考えている。結束材には、藁の特性である生分解性、質感が損なわれないよう麻紐を採用した(写真③)。長瀬は、卒業後は藁をライフワークにするべく藁で村おこしをしていた稲垣村に移住して村の職員になった。

1999年、稲垣村は、ワラボーの遊具についての実用新案登録(登録第3061023号)を取得し、また、ひらがなをベースにワラボーのロゴをデザインし商標登録(登録第4332058号)を取得した。(現在は失効)

2004年に、長瀬は、有志とともに「稲垣藁の会」(現メンバー12名)を立ち上げた。会の目的は、資源としての藁に注目し、藁の文化と技術を継承するとともに、現代の生活に適した新しい藁製品を開発することである。

「稲垣藁の会」では、村のお年寄り達から藁細工の技術を習得したり、新しい藁細工の開発をしたりしながら、藁文化の啓蒙のためさまざまな社会教育活動を行ってきた。そうした「稲垣藁の会」の活動の一つが、藁を束ねた棒のワラボーに関するものである。

ワラボーの特長

からだにやさしい	適度な強度をもちつつ、その表面はやわらかく、クッション性を備えているため安全に遊ぶことができる。
周りにやさしい	落としても大きな音が出ない。床材を傷めることも少ない。
軽い	大きさの割に軽く、子どもでも容易に持ち上げたり、運んだりできる。
保温性	寒冷な環境でも積極的に触れる。
におい	においの情報も遊びの要素であり五感を総動員して遊べる。
二次利用	劣化等により遊具としての使用が終わったときは、結束を解いて①藁細工②かつおのたたき等の燻製作り③燃料④家庭菜園での敷き藁等に利用できる。
地球にやさしい	生分解性があり、使用後は土に帰すことができる。
手作りできる	シンプルな構造であることから、特別な道具がなくても手作りができる。

○大学の授業におけるワラボーづくり

弘前大学教育学部を本務校とする富田は、「稲垣藁の会」の野崎氏を講師にむかえ、授業「小学校図画工作教育法」において、ワラボーを教材にした4回の授業をおこなった。当該授業は、教育学部の小学校教員養成課程の2年生を対象にしたものである。富田は、かつて青年海外協力隊員として派遣された中米ホンジュラス共和国において小学校高学年の生徒に木工や公園遊具の製作を教えていた。ホンジュラスでは、職業訓練指導員が小学校の生徒とともに製作した椅子、机、玩具などをその小学生が通う小学校や、同じ地区の幼稚園で使用していた。自身や後輩が使うものを自分たちの手でつくる子どもたちの姿に、高度に分業化された現代日本では失われてしまった、人間社会が守るべきあり方を感じた。富田が、弘前大学の授業に、ワラボーを取り入れたのは、図画工作科としての視点のみならず、学生が自らが所属する学校の附属園の幼児のために何かをつくる、といった世代を超えてつながる社会のあり方を学生たちに学んでほしかったからでもある。この教材は、小学校中学年以上の図画工作科の教材として、ほぼ同様の形で実施できるものと思われる。各回の授業は次のようにおこなった。(図①参照)

1回目 ワラボーづくり (写真④⑤)

- ・緩まない結び技法「巻き結び」を教える。
- ・握り拳ほどの太さの一束の藁を各自に与え、上部20cmほどをハサミで切り取る。
- ・藁の束を二分割し、片方の束の上下を反転させて、一つの束に戻し、全ての藁を混ぜ合わせる。この作業によって全体の太さが均等になる。
- ・藁の束を4ヶ所ほど「巻き結び」のあとに「丸結び」をして固く結び丸棒状にする。
- ・押し切りや大型のハサミで両端を切断する。

2回目 ワラボーで、つくりたいものをつくる。また、「うまくできたら幼稚園にもって行って遊んでもらおうかな」と伝えた。(写真⑥⑦⑧)

- ・丸棒型の割り箸をのこぎりで半分の長さにし、鉛筆削りで端を丸みをもった尖塔状にする。
- ・ワラボーの円形状の断面に、上記の割り箸を突き刺すことによって、複数のワラボーを繊維方向に接続できる。4人ほどのグループで、つくりたいものをつくる。

3回目 「わらぼージョイント」づくり (写真⑨)

- ・L字型、Y字型、十字型などの形でワラを折り曲げた状態で巻き結びをすることによって各種の「ワラボー・ジョイント」をつくる。これによって任意の方向にワラ棒が接続できるようになる。

4回目 ワラボーとワラボー・ジョイントで、作りたいものをつくる。

○学生の感想

上記の大学での授業の2回目を終えた時点で、受講学生に自由に感想を書いてもらった。いくつか紹介する。

- ・藁を使って、こんなにもたくさんの遊びが生まれるとは思わなかった。米を収穫し必要でなくなった藁を遊び道具にするという考えはSDGsだと気が付いた。また、グループで作品をつくるときは、話し合いながら改良を重ねて、これこそ、アクティブ・ラーニングだと思った。
- ・藁は、そのままだとやわらかいが、束にして縛ると硬くなり、工夫次第でいろいろな利用ができることに驚いた。藁でできたものは、しめ縄などの伝統的なものしかないと思っていたが、ワラボーと箸で、プロペラ、コマ、東京タワー、けん玉、忍者セット、などいろんなものが出来た。素材は工夫一つでいかようにもなるものだと実感した。

- 何を作ろうかと、藁を触っているとカサカサとした触覚や、パキパキと折れるかんじなど、ただ触っているだけでも楽しかった。巻き結びは緩まないで、普段の生活にも活かせると思った。私が通った小学校には田んぼがあり、田植えや稲刈りをした。こういった学校に、藁をつかって何かをつくる活動をとりいれるといいと思った。
- 大量に出る藁を、子どもたちのおもちゃにするのは面白いと思った。藁焼きが問題になっているなかで、藁を活用する方法をほかにも探すべきだと思った。おもちゃにして、多少雑に扱われてもよく、藁は処分が簡単なのがいい。藁にかぎらずとも、いらぬものだと思われるものから、なにかをつくり出す活動を小学校でしていきたい。
- 藁は曲げると折れる弱いものだと思っていたが、案外丈夫で、また自由な形ができることを知った。自分たちの班ではけん玉をつくった。はじめはけん玉をつくるのは無理だと思っていたが、いろいろ工夫していくうちに、ちゃんと遊べるけん玉ができた。今度は、別なものに挑戦してみたい。
- 藁を触るのは小学生の時以来で懐かしく、温もりを感じた。藁ときくと動物のエサぐらいにしか思っていなかったが、工夫しだいで、いろんなものになることを知った。藁のおもちゃは、やわらかく、子どもにいいと思った。藁を紐で束ねたあとからでも、形をかえることができ、遊びが広がっていくかんじが面白かった。

比較的、稲作の盛んな地域にある弘前大学であるが、ほとんどの学生が、日常的に藁を触ることはないようで、藁に触れた経験のある学生も小学校での生活科などにおいてだった。受講学生たちは、みな、生き生きと活動し、藁を使った遊びや造形の広がり、さまざまな可能性を感じたようである。

○活動の概要

松山の本務校である弘前大学教育学部附属幼稚園において2020年11月30日に、やま組（5-6才児、男子13名、女子11名、計24名）を対象に実施した。同年11月9日におこなった「藁であそぼう」につづく藁の活動である。活動は、前半30分は長短2種類のワラボー（長さ34cmを60本、長さ17cmのものを60本）だけを使った活動であり、後半30分が、Y字型やX字型などのワラボー・ジョイントと割り箸（半分長さにして両端を丸みのある尖塔形にしたもの）、輪にした紐ゴム、を加えた活動である。

前回の「わらであそぼう」で存分に活動を楽しんだ子どもたちは、再び、藁で活動できることを楽しみにしていた。「また藁のお布団で眠りたいな。」などと会話している様子が見られたが「今日はワラボーで遊ぶよ」と伝えると、子どもたちはすぐに気持ちがワラボーに向き、どんな風に遊びたいかを会話していた。

○活動の様子と所見

下記の表は、対象幼児のクラス担当者である松山が、活動の様子とその所見をまとめたものである。

シーン	活動の様子	行動の分析	所見
①	活動を始める前に藁の会の野崎先生より、藁についての話をしていただいた。藁には固いところと柔らかいところがあることを教わった。Gは「そうだったんだ!」と大喜び。子どもたちは遊んでいた藁のを知ることができて嬉しそうであった。	○興味・感心 ○知的的好奇心	前回遊んだ藁がどういうものであるのか、藁の会の野崎先生より話していただいた。実際に遊んだ素材であったため、子どもたちは十分にイメージしながら話を聞くことができていた。中でも前回遊んだ藁は柔らかい部分を使っていたが、ワラボーは固い部分でできていることを興味深く聞いていた。

シーン	活動の様子	行動の分析	所見
②	BとYは長めのワラボーをラケットのように手に持って向かい合い、短いワラボーをたたき、床に滑らせて打ち合っていた。打ち合いは長いこと続き盛り上がっていた。	○新しい遊び方の発明 ○熱中 ○ルールのある遊び	遊びの材料が今回はワラボーになり、子どもたちの遊び方が変わった。真っ先に長めのワラボーとボール代わりにする短いワラボーを広い空間に持ち出し、距離を取って座るやいなや短いワラボーの打ち合いが始まった。打ち始める順番は話し合いながら決め、より速くに飛ばした方が勝ちというルールを作って遊びを楽しんでいた。
③	GとAとOは長短様々な長さのワラボーをそれぞれ1ヶ所に集め、長方形のような形を並べて作り始めた。長方形の土台ができあがると、その上にワラボーを乗せていった。「何を作っているの?」と教師が尋ねると、「バーベキューをしているんだよ。」と笑顔で応えた。	○なりきる ○物の見立て	ワラボーを組み合わせてバーベキューコンロを作るという発想がおもしろい。コンロができあがると上に乗せたワラボーは肉や野菜に見立て、手にはトングを持つようにして遊びを楽しんでいた。バーベキューごっこという遊びを思い付き、形から発想する感覚を生かしながら自由に遊んでいる様子が見られた。
④	Nは同じ長さのワラボーを積み上げてタワーを作っていた。ピラミッドのようにしたかったがうまくできないようだ。「うまく積めない。」と言いつつも何度も挑戦を続けていた。	○挑戦 ○あきらめない ○物の見立て	Nもワラボーを見て、「タワーを作りたい。」と発想し挑戦していた。筒状であるため、ピラミッドのように作りたが途中で転がってしまう。「うまく積めない。」と言いつつも何度も挑戦している姿から、主体的に取り組む姿が見られた。
⑤	KとR、I、Uはワラボーの柱を立ておうち作りをしていた。4人の家ということで、かなり大きい場作りを始めていた。しかし、ワラボーが途中で足りなくなってしまった。Uたちは③でGたちが使っていたキャンプファイヤー用のワラボーを譲ってもらいに出向いていた。しかし、Gたちも少なくなると困るので、そのことを話し合っていた。	○物の見立て ○工夫 ○折り合いをつける	大量のワラボーを用意して始めたが、Kたちが発想する家づくり分のワラボーは足りない。発想した場に対して量的な感覚を掴むのはまだ難しいと感じた。そこで規模を小さくするというよりは、近くの人に譲ってもらうという解決方法を試すも、相手も必要で使っているので、折り合いをつけなければならなかった。自己中心的に相手の場を壊してまで、ワラボーを手に入れようとしていたKには教師から「Gくんたちはキャンプファイヤーを作っているんだよ。」と促しを受けた。
⑥	YとQはワラボーを何本も慎重に並べていた。教師が何をしているのか聞いてみると「ドミノを作っているんだよ。」と教えた。「すごいね。」と教師が言うと「並べるの大変!!」と答えた。しかし表情は明るい笑顔で時折倒れてしまっても慎重に直し作り続けた。	○新たな発想 ○慎重な作業 ○熱中	同じ形の物がたくさんあることからドミノ作りを発想した2人。生活経験の中にドミノ遊びがあったのだろうか。藁であるために縦に何個も立たせるのは大変な作業であるが、終始楽しく並べ続けている2人の姿があった。いざ倒してみると本物のドミノのように倒れなかったが、チャレンジできたことをとても喜んでいて。
⑦	Yはドミノ遊びを終えると長めのワラボーを両手に持ち叩いて音を出していた。教師が近づくと「ワラボー同士を叩いてみると長さで音が違うよ。」と教えた。それを見たRもYのように叩いて音の違いを楽しんでいた。	○友達の模倣 ○音の違いの発見	ワラボーを使って造形的な遊びをすることは予想していたが、楽器に見立てて使い、長さによって音が違うということを発見したYは素晴らしい感性をもっていると感じた。また、それに興味を示したRも音の違いを体感し存分に楽しんでいて。
⑧	ワラボー遊びが25分程経過した後、富田先生がジョイントできる部品や棒状のみではない様々な形のワラボーを子どもたちに紹介した。子どもたちはワラボー同士がくっつき、更に棒状のみではないワラボーの形があることに大喜び。早速製作意欲が湧いてきた様子であった。	○新しい素材への出会い ○製作意欲への動機付け	⑦まで棒状のワラボーのみを提供し、その中で活動を楽しんでいた子どもたち。ここで富田先生より新しい素材の紹介を受け、話を聞いた子どもたちは大喜びであった。ワラボー同士が繋げられること、棒状以外の様々な形のワラボーが使えることに興味津々であった。
⑨	Oたちはワラボー同士を繋げられたことに大喜び。どんどん繋げてあつという間に5m程の長さにまで繋げていた。気づくと役割分担も生まれ、部品をもってくる人、どんどん繋げる人、壊れたところを直す人と協力して活動していた。	○試す ○仲間と協力 ○役割分担	早速繋げる活動に入ったOたち。一人一人がばらばらに活動するのではなく、自然と役割分担が生まれ、協力し合っていたのは素晴らしい。何か作りたい物があるというよりは、新しい素材に出会い、どんどん試している姿が印象的であった。

シーン	活動の様子	行動の分析	所見
⑩	SとAは様々な形のワラボーに興味を示し、それをいくつか持ってくるとジョイントして何かを製作していた。教師が尋ねると「何になるかわからない。」と答えた。しばらくすると剣になったようだ。	○素材への興味 ○試す	SとAは作りたい物があらかじめあるということではなく、出会った新しいワラボーに興味をもった。ジョイントにもチャレンジしていた。素材を色々試すうちに、最終的には剣を完成させていた。新しい素材に慣れることで次第に完成形へと向かう姿が見られた。
⑪	KとWは⑨でOたちが作った長い棒に近づくと、ワラボーの上を落ちないように渡ったりワラボーの周りをジャンプしたりと遊具のように遊び始めた。「藁ジャンプだよ。」と教師に教えていた。	○興味・感心 ○新たな発想 ○遊びの共有	とても長いワラボーはKたちの興味を引いていた。それまで違う遊びを楽しんでいたWも集まり、思い思いに遊び始める。製作物が遊具として使われることになった。とても長いので渡りきるまでに時間がかかり遊び甲斐があったようだ。
⑫	⑨で連結されていたワラボーの他に、別の所でもRたちが長いワラボーを作っていた。Oが「ほくたちのとくっつけよう。」と提案し、早速お互いのワラボーを繋げた。そのあまりの長さに驚いたKは「世界一長いヘビになったね。」と大喜びして、またその上をジャンプしたり綱渡りをしたりしていた。他にも渡って遊ぶ人が増え、ドンジャンケンも始まった。	○共同作業 ○物の見立て ○感動 ○遊びの発展	Rたちが別の所で連結していくうち、Oたちと繋げようということになった。その柔軟な発想のおかげでたちまち10m程にもなる長いワラボーが出現した。それを見て「世界一長いヘビになった。」という素敵な見立ても出てきた。また、作り終わるとすぐに遊具と化し、一斉に遊び出すところにも柔軟な発想が感じられた。両端から渡り、ぶつかるところでドンジャンケンをする姿も見られるようになった。
⑬	Yは短いワラボーを斜めにくっつけると王冠に見立てて頭に乘せていた。活動も後半になり、製作活動に再び興味をもったようである。	○ひらめき ○物の見立て	次第に大人数で遊ぶ姿が見られていたが、活動時間が残り少なくなると、また個々に製作する姿が見られるようになった。Yは短いワラボーを斜めに繋げることで王冠に見立て、自分の頭の形に調節しながら作ることができた。
⑭	GやAたちは、銃のような物を作り、輪ゴムを引っかけて飛ばすという遊びを始めていた。少し前まで剣などを作っていたが、輪ゴムを飛ばしたいと仕掛けを考えながら銃に作り替えていた。Bも加わり、3人で誰が遠くまで飛ばせるか対決して楽しんでいた。	○工夫 ○ルールのある遊び ○試行錯誤	Aたちはワラボーの素材を十分試した後、普段の廃材遊びから想起したであろう、ゴム飛ばし遊びへとシフトさせていた。できあがるまで試行錯誤する様子が見られたが、銃が完成すると、すぐさま友達同士で飛ばし合いを楽しんでいた。素材の出会いから作った物で遊ぶという一連の姿を見ることができた。
⑮	H, Z, R, T, Wは、⑫で作った長いワラボーの一部をリレーのスタートとして見立て、棒状のワラボーをバトンにしてリレーごっこを始めた。道具は全てワラボーを使った物であり、子どもたちの工夫が見られた。	○物の見立て ○工夫 ○ルールのある遊び	活動時間最後の辺りに見られた遊びはリレーごっこであった。運動会で経験したリレーを思い出し、バトンやスタートライン等、全てワラボーを使って行っていた姿から工夫は柔軟な発想力を感じた。また、ルールを自分たちで決めて遊ぶことができていた。

○活動の考察

シーン① ホールに着くと、まず、藁とは、どういうものであるのか、「稲垣藁の会」の野崎先生の話を書いた。前回十分に遊んだ藁についてであり、子どもたちは初めて聞く話に興味津々であった。実際に遊んだ素材であったため、子どもたちは十分にイメージしながら話を聞くことができていた。中でも前回遊んだ藁は柔らかい部分を使っていたが、今度遊ぶワラボーは固い部分でできていることを興味深く聞いていた。

シーン② 前回のふわふわとしたシジだけの藁から、今回は棒状のワラボーになり、子どもたちの遊び方が変わった。まず、ワラボーを広い空間に持ち出し、長めのワラボーをバット代わりに、短いワラボーをボール代わりにして、ワラボーの打ち合いが始まった。打ち始める順番は話合いながら決め、より遠くに飛ばした方が勝ちというルールを作って遊びを楽しんでいた。

シーン③ 別の子どもたちはワラボーを組み合わせるバーベキューコンロを作っていた。コンロができあがると上に乗せたワラボーは肉や野菜に見立て、手にはトングを持つようにして遊びを楽しんでいた。バーベキューごっこという遊びを思い付き、形から発想する感覚を生かしながら自由に遊んでいる様子が見られた。

シーン④ ワラボーを見て、「タワーを作りたい。」と発想し挑戦していた。筒状であるため、ピラミッドのように作りたいが途中で転がってしまう。「うまく積めない。」と言いながらも何度も何度も挑戦している姿から、主体的に取り組む姿が見られた。

シーン⑤ 大量のワラボーを用意して始めたが、自分たちが発想する家づくり分のワラボーは足りない。発想した場に対して量的な感覚を掴むのはまだ難しいと感じた。そこで規模を小さくするというよりは、近くの人に譲ってもらうという解決方法を試すも、相手も必要で使っているの、折り合いをつけなければならなかった。自己中心的に相手の場を壊してまで、ワラボーを手に入れようとしていた子どもには教師から「キャンプファイヤーを作っているようだよ。」と促しを受けた。

シーン⑥ 同じ形の物がたくさんあることからドミノ作りを発想した子どもたちがいた。生活経験の中にドミノ遊びがあったのだろうか。藁であるために縦に何個も立たせるのは大変な作業であるが、終始楽しく並べ続けている2人の姿があった。いざ倒してみると本物のドミノのように倒れなかったが、チャレンジできたことをとても喜んでいて。

シーン⑦ ワラボーを使って造形的な遊びをすることは予想していたが、中には楽器に見立てて使い、長さによって音が違うということを見つけた子どもがいて、素晴らしい感性をもっていると感じた。また、それに興味を示した子どもも音の違いを体感し存分に楽しんでいた。

シーン⑧

それまで棒状のワラボーのみを提供し、その中で活動を楽しんでいた子どもたち。ここで富田先生より新しい素材（各種ワラボー・ジョイント、半分の長さの割り箸、輪にした紐ゴム）の紹介を受け、話を聞いた子どもたちは大喜びであった。ワラボー同士が繋がれること、棒状以外の様々な形のワラボーが使えることに興味津々であった。

シーン⑨ 早速繋げる活動に入った子どもたち。一人一人がばらばらに活動するのではなく、自然と役割分担が生まれ、協力し合っていたのは素晴らしい。何か作りたい物があるというよりは、新しい素材に出会い、どんどん試している姿が印象的であった。

シーン⑩ 二人は、作りたい物があらかじめあるということではなく、出会った新しいワラボーに興味をもったようだ。ジョイントにもチャレンジしていた。素材を色々試すうちに、最終的には剣を完成させていた。新しい素材に慣れることで次第に完成形へと向かう姿が見られた。

シーン⑪ とても長く繋がれたワラボーに興味をもった子どもたち。それまで違う遊びを楽しんでいた子どもも集まり、思い思いに遊び始める。製作物が遊具として使われることになった。とても長いので渡りきるまでに時間がかかり遊び甲斐があったようだ。

シーン⑫ 連結していくうち、他のお友達のものとも繋げることになった。その柔軟な発想のおかげでたちまち10m程にもなる長いワラボーが出現した。それを見て「世界一長いへびになった。」という素敵な見立ても出てきた。また、作り終えるとすぐに遊具と化し、一斉に遊び出すところにも柔軟な発想が感じられた。両端から渡り、ぶつかったところでドンジャンケンをする姿も見られるようになった。

シーン⑬ 次第に大人数で遊ぶ姿が見られていたが、活動時間が残り少なくなると、また個々に製作する姿が見られるようになった。ある子どもは短いワラボーを斜めに繋げることで王冠に見立て、自分の頭の形に調節しながら作ることができた。

シーン⑭ ある二人はワラボーの素材を十分試した後、普段の廃材遊びから想起したであろう、ゴム飛ばし遊びへとシフトさせていた。できあがるまで試行錯誤する様子が見られたが、銃が完成すると、すぐさま友達同士で飛ばし合いを楽しんでいた。素材の出会いから作った物で遊ぶという一連の姿を見ることができた。

シーン⑮ 活動時間最後の辺りに見られた遊びはリレーごっこであった。運動会で経験したりレーを思い出し、バトンやスタートライン等、全てワラボーを使って行っていた姿から工夫は柔軟な発想力を感じた。また、ルールを自分たちで決めて遊ぶことができていた。

○活動のふりかえり

約1時間の活動のあと、子どもたちを集めてふりかえりをした。松山が「最初は、棒の形のワラボーがたくさんあったけど、くっつけるのはなかったよね。富田先生が、いろんな形のワラボーとか、くっつけるための棒とか出してくれたよね。そうしたらもっと違う考えがいっぱいでできましたよね。じゃあ、どんな遊びしたのかお話ししてくれるお友達は立ってください」と言うと、子どもは、「長〜くしてあそんだ」「へびみたいにして、ジャンプしてすすんで、ぶつかったらジャンケンした」「長いのをスタートにして、短いのをバトンにしてリレーした」「シャワーつくってあそんだ」「シャボテンつくった」「長いワラボーで鉄砲つくった」「宇宙船つくった」「園庭にある持って乗るのつくった」などと応えていた。その後、子どもたちで、接合されたワラボーを分解し、箱に入れて片付けをし、挨拶をして活動を終えた。

○まとめ

藁は、軽く、やわらかく、保温性、通気性に優れ、人の体にやさしい素材である。前回の「藁であそぼう」では、藁を大量に準備して、子どもたちは、投げたり、藁のなかに埋もれたり、藁そのものの感覚を楽しんでいたが、本研究の「ワラボーであそぼう」では、棒状の形をしたワラボーを遊びの素材としたことから、並べる、積む、繋げるといったことをしながら、ワラボーを何かに見立てて、ごっこ遊びをしながら、「造形遊び」が展開された。また、活動の後半には、ワラボーどうしの接合を可能にする補助材を加えたことにより、〇〇をつくるという、造形活動が展開され、さらには、ワラボーを遊具にして、飛び跳ねたり、かけっこをしたり、投げたり、打ったりと、全身をつかった運動をした。ワラボーは、藁の特徴である、軽さ、やわらかさをもちつつも、束にして固形化することによって、「積み木遊び」や「ブロック遊び」の材料になり、さらには、子どもの自由な発想のもとに、さまざまな遊びと運動を導き出すきっかけになったのである。

ワラボーをつかった活動は、大学生を対象にした実践においても豊かな創作活動が展開された。ワラボーが、広く幼児教育の場に広がるとともに、小学校や老人施設など、さまざまな場で使われ、豊かな遊びと表現活動が展開していくことを期待する。

富田晃, 松山祐子, 野崎克行「藁であそぼう—自然素材をつかった幼児教育と表現の芽生え—」『弘前大学教育学部紀要クロスロード』25, 2021

野崎克行, 富田晃「地域文化と造形教育—稲藁を素材としたもの作りの授業—」『弘前大学教育学部紀要』123, 2020

長瀬公秀「藁棒材遊具の造形展開とその活用に関する研究—青森県稲垣村における地域資源・藁の有効活用提案—」千葉大学工学部工業意匠学科修士論文, 1996

宮崎清『図説・藁の文化』法政大学出版局, 1995

吉本和子, 脇淵爾良『積木と保育』エイデル研究所, 2014

文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編 (平成29年告示)』

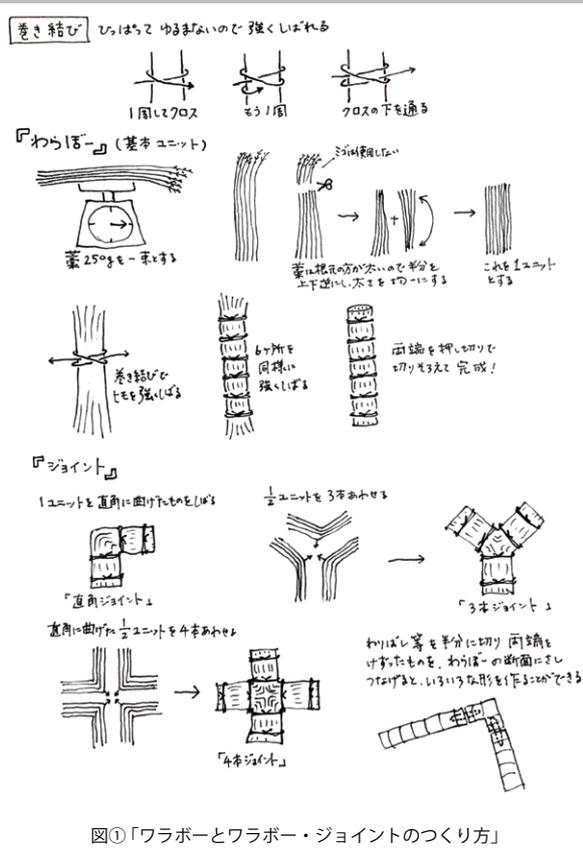
文部科学省『幼稚園教育要領解説 (平成30年3月)』



写真①



写真②



© 稲垣薫の会



写真③



写真④ わらの束を半分を上下を逆にして混ぜ合わせる



写真⑤ 緩まない「巻き結び」



写真⑥ 王様の冠ができました



写真⑦ ちゃんと遊べるけん玉です



写真⑧ プロペラが回る



写真⑨ 各種ワラボー・ジョイント



シーン①



シーン②



シーン③



シーン④



シーン⑤



シーン⑥



シーン⑦



シーン⑧



シーン⑨



シーン⑩



シーン⑪



シーン⑫



シーン⑬



シーン⑭



シーン⑮